

## 優秀修士論文概要

## ムハンマド・エル＝クルドの『リフカ』における現在進行形のナクバ

— パレスチナ現代詩における「笑い」の諸相の例示として —

高 安 海 翔

本稿は、東エルサレムのシェイフ・ジャッラーフ地区出身のパレスチナ人作家、ムハンマド・エル＝クルド (Mohammed El-Kurd, 1998-) の詩集“Rifqa” (2021、以下『リフカ』) における抵抗文学的な「笑い」の諸相を明らかにすることを旨とした文学研究である。既存の書評では既に、アラビア語が母語である詩人により「英語」で書かれたこの詩集に対し、パレスチナ文学における現実描写の歴史を批判的に受け継いでいるとともに、アラビア語圏を越えて広がるディアスポラのパレスチナ文学の潮流にあり、また(ポスト)コロニアル文学を批判的に吸収した実作であるとの評価がなされているが、一方で作品の根幹を成す「笑い」に関する議論は部分的なものにとどまり、本稿は内容と形式の観点からこれを精査している点で学術的な価値を持つ。

序では研究背景に関して、(1)パレスチナ人による抵抗文学の系譜への位置付け、(2)パレスチナ文学の英訳史やディアスポラのパレスチナ文学の潮流への位置付け、(3)シェイフ・ジャッラーフ地区の歴史、1948年のハイファでの民族浄化の過程、エル＝クルドの作家・活動家としての経歴、既存の評価といった前提情報を整理し、最後に本稿の研究手法と構成を述べた。

一章の前半部では、エル＝クルドと同郷のパレスチナ人活動家が不当に勾留される際にみせた「抵抗の笑い」と、オスロ合意でアラファトがラビンにみせた現状追認的な「欺瞞の笑い」との差異から、「笑い」という表徴にかけられた政治的な負荷を問題にし、またパレスチナ人のユーモアに関する人類学的研究や「美学」的研究の範疇と照らし、本稿における「笑い」の射程を限定した。後半部では代表的なパレスチナ人作家の文学作品として、ガッサーン・カナファーニー、エミール・ハビービー、リファト・アルアライールの作品を取り上げ、パレスチナ文学史において既に悲喜劇的な劇構造やウィットのもたらす「笑い」が占領下での怒りや悲嘆と潜在的に切り離し難く描かれてきたことを提示した。

二章では、ガザの作家を中心に、入植者植民地主義の構造的な暴力がもたらす生や喪の破壊のもとでどのような抵抗が描かれているのか、ガザで読まれるカフカを導きに「笑なき笑い」という観点から論じ、現実の悲惨さゆえに英雄性を付与しがたい「殉教者」の存在に関する描写、東エルサレムにおける「ネクロバイオレンス」の告発と遺族の感情の描写、占領下での精神疾患や「自殺」に関連した描写が、21世紀のパレスチナ文学における主題の一部を形成しており、『リフカ』がこの主題を分かち合っていることを指摘した。前章と本章を以て、パレスチナ文学においてはジェノサイドや入植者植民地主義によってもたらされる暴力や篡奪の対象として「笑い」が脆弱さを被っており、抵抗の「笑い」はこの脆弱さと同時的に存在していることを明らかにし、以降の分析はこの視座に基づいた。

三章では『リフカ』の詩法を全般的に論じており、「笑い」は「美」であり生の象徴として祖母リフカから受け継がれたものだということが作家論的に示し(第一節)、イスラエルによる国家的な検閲、作家の自己検閲、メディアの検閲という三重の検閲の最中で、『リフカ』の目的が、単なる犠牲者に陥

ることのない真に自由で主体的なパレスチナ人の姿とその「感情」の描出にあることを示した（第二節）。また翻訳の植民地主義的な役割や機能を踏まえ、詩集がアラビア語と混淆した英語で書かれていること自体（ポスト）コロニアル文学的なライティングの伝統を踏まえており、帝国の言語に対して抵抗的であること（第三節）を論じた。詩学的な観点からは『リフカ』における人称の問題や反復と対位の技法について論じており、詩群において一人称は個人的な物語と集合的な記憶との結節点となっていることや、単語が一種の場として機能させられており、語の共時性や通時性、その変遷的あるいは定住的なあり方によって、オスロ合意以降のパレスチナ人が抱く「疲れ」と占領者の傲岸さとは、内容と形式の両面において表現され、「笑い」と同居させられていること（第四節）、そして表象における視覚性やパフォーマンス性に根源的に伴う暴力性を倫理的な契機として方向づけ直すことで、固定的でも単一的でもない語り主体を際立たせていること（第五節）を論じた。第六節で本章の議論をまとめ、以降の章では作品分析を行なった。

四章では『リフカ』の第一章から3作品を論じた。分析結果は次の通りである。「エルサレムで (In Jerusalem)」は、花火と爆弾をめぐる認識の齟齬を通し、「笑い」をもたらす災厄こそ最も悲劇的な災厄であるという、『リフカ』に通底する主題を端的に提示した冒頭の短詩である。「これが私たちの踊る理由 (This Is Why We Dance)」は、欺瞞の笑いに追い込まれながらも怒りの感情そのものを歌い上げている口承的な詩である。表題作の「リフカ (Rifqa)」は、詩人の祖母リフカの個人史と現在進行形のナクバを交差させており、皺へ無数に刻まれる無名の顔に現在進行形のナクバが象徴され、苦難がいつか笑い話になるまでと苦闘する祖母の姿が強調されている。これらの分析と評価をもとに、本章ではいずれの詩篇も主題や舞台はパレスチナを中心にしており、「笑い」を通じてナクバの悲惨さと感情の収奪の深い結びつきを描いていると論じた。

五章では、詩集『リフカ』の第二章から2作品を論じた。分析結果は次の通りである。「水曜日 (Wednesday)」は、子どもや看護師によってナクバがパロディ的に語られつつ、ナクバの現在進行形性が強調されている詩である。「私の肩にもたれかかって眠る老女 (Elderly Woman Falls Asleep on My Shoulder)」は、「私」と「老女」が検問所を通過する場面を描き、兵に対し笑顔を突きつけた別の兵に罵りをぶつけるという、無名の女性の抵抗的な行動を描いている。これらの分析と評価をもとに、詩集の反復的な性格と、抵抗的な笑いに重ねられる支配の圧倒的な現実やパロディの存在を指摘した。

六章では、詩集『リフカ』の第三章から4作品を論じた。分析結果は次の通りである。「笑う (Laugh)」は、パレスチナの解放運動とアトランタにおけるブラックライブズマター運動に交差性を認めつつ、悲しみに抗うための「笑い」を強調した詩である。「クローガー (Kroger)」では、「検閲」の実際の脅威とメディアにおけるナクバの矮小化が詩人の実体験をもとに描かれ、容易に欺瞞の笑いへと加担することのないパレスチナ人の姿、そして形骸と化した植民地主義的な喜劇の構造や様相が明らかにされている。「自伝 (Autobiography)」では、詩人の幼少期と占領下での自由な笑いが描かれつつ、パレスチナについて語り抵抗する主体としての自らが公的な場で抑圧され続けてきたことが告白される。「世間話 (Small Talk)」は、占領に加担する企業の女性が、無知ゆえにパレスチナの占領を表す形容詞で自らの生活を語る滑稽さを描いた、ウィットに富む詩である。これらの分析と評価をもとに、本章では詩の舞台がアトランタとパレスチナを往還することで、パレスチナの歴史的な文脈に世界的な広がりをもたらされており、イスラエルによる入植者植民地主義の最大の支援国であるアメリカにおける占領支援者との会話の不成立や帝国主義的な「喜劇」を描くことで「欺瞞の笑い」が別扱されていることを論じた。

七章では、詩集『リフカ』の最終章である第四章から6作品を論じた。分析結果は次の通りである。「反-伝記 (Anti-Biography)」は第三章の「自伝」のリライトであり、アメリカ現代詩の影響のもと詩作や伝記的記述それ自体を捉え返し、祖母の願う帰還が果たされえないすべての世界を嘲笑の対象として描き出している。詩篇「なぜあなたはパーティーでナクバの話をするのか? (Why Do You Speak of the Nakba at the Party?)」はコメディの体裁を取りつつ、甚大な規模で降りかかる誤表象や人種差別への怒りをさめざめと笑う様が描かれている。「カラスたち (Crows)」は、パレスチナ人をテロリストと見做してやまない世論形成者が自らの手で誤表象し続けた存在に直面し狼狽える滑稽さと、「私」の「彼ら」に対する激しい怒りを表している苛烈な詩である。「ブッシュ (Bush)」は、2008年のブッシュへの靴投げ事件に言及しつつ、イスラエルの入植者植民地主義を支援するアメリカの「ブッシュ」らによって目をかけられた世界の幻想性を告発している。「史上最大のパンチライン (The Biggest Punch Line of All Time)」は認知症となった祖母の記憶に残り続けた「エルサレムは私たちのものだ」という言葉を、詩集『リフカ』、祖母の一生、ナクバの歴史の中の最大のパンチラインとみなす詩的決断によってつくられた、クライマックスの詩篇である。「シェイフ・ジャッラーフは燃えている (Sheikh Jarrah Is Burning)」は詩に対して非詩を対置するアンチクライマックスの詩篇であり、東エルサレムにおける入植者植民地主義の現実と抵抗のヴィジョンを提示している。これらの分析と評価をもとに、この最終章で「笑い」は最も先鋭化し、これまでの「笑い」を絶えず反復しつつ、人間性の最終的な砦としての普遍的な射程を獲得していると論じた。

結論として、本稿は『リフカ』が、個人史・家族史・パレスチナ史、そして帝国主義の歴史の交差の中で詩を成立させ、悲惨の一字へと回収されえないパレスチナ人の感情の実相を表すべく書き込まれた多様な「笑い」を現実のパレスチナ人の行為主体性を損なうことなく植民地主義的な権力勾配を転覆させる力として描き出している、現代パレスチナ文学の最先端にある作品として存在していることを明らかにしたと言える。